

## 引き戸の存在

東京大学教育学部附属中等教育学校

二年 内田 有亜

私の部屋の扉は引き戸である。今住んでいるこのマンションに、三歳の時に引っ越してきた。当時、この引き戸を開けて目に入ってきた自分の部屋に、期待を膨らませたことは今でも覚えている。それから十一年間、私の一日は、毎朝引き戸を開けることから始まる。

私の部屋はリビングに面していて、三枚の引き戸を全開にするとリビングから部屋の様子が丸見えだ。母から、寝る時以外は引き戸を開けておくように言われているので、プライバシーがないと不満をこぼしたことも少なくない。毎日監視されているようで、部屋の扉が引き戸でなく開き戸だったらよかったのに、と思うこともあった。だが、母が私に扉を開けておくように言っていたのは、きちんと意味があったのだ。

それを理解したのは、ある日のことだった。その日は嫌なことがあって、落ち込んでいた。ふとリビングを見ると、母が料理をしている姿が目に入った。なんだか安心して、その日起こったこと、そのことで自分がどう感じたのかを少しずつ母に話した。それに対して、具体的にアドバイスをくれた訳ではないが、母は真剣に聞いてくれた。それがどんなに心強かったことか。

引き戸が開き戸と大きく違う点は、開けるか閉めるかの二択にならない点だと私は思う。そのときの心境に合わせて開け方を変えることで、家族との距離の取り方を補ってくれる。今は、勉強に集中したい時、一人になりたい時は引き戸を半分ほど閉めるようにしている。住まいは、自分の世界と家族との世界の架け橋になってくれる場所だと感じる。近すぎても遠すぎても居心地が悪い。しかし、引き戸があることによって、家族との適切な距離が保たれやすくなる。いつかこの家を離れる時まで、これからもこの場所で、家族との日々を大切に過ごしていきたい。